

横山重編

宝所时代物語

六

古典文庫

横山重編

宝所时代物誌

六

古典文庫

古典文庫第二〇二冊

昭和三十九年五月二十日 印刷発行

©

(非売品)

校者 横山重

六 発行者 吉田幸一

室町時代物語

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行人 東京都(王子局区内)
北区西ヶ原町三ノ三四

古典文庫

電(九一九)二七一七
振替口座東京一四五九七番

凡 例

一、古典文庫の「室町時代物語」の第六冊として、こゝに五篇を掲出した。これらは、文部省の御援助による「室町時代物語の整理」の一部の発表である。その旨を第一に記して茲に感謝の意を表す。

一、第一の「みしま」は神道集にも出てをり、奈良絵本にもあつて、室町時代物語集の第一にも掲出した。が、かながきの写本を得たので、これを捨てがたいものとして古典文庫本にも採用した。

一、第二の「石山物語」は伝本が稀らしい。編者は零本の「石山物語」を二ヶ所であつめ合せたが、その末尾に、明暦四年と年記のある「紫式部の巻」があるべきものと判断して、こゝに両者を掲出した。

一、第三の「大ふつの御えんき」は多く知られてゐないものである。それに、第

四の「東大寺大仏之縁起」を添へて、理會を容易になし得ると考へた。この二冊は慶大図書館の蔵本であるが、特に御許可を得た。

一、第五の「大フツクヤウ物カタリ」は、同種の本の中で一ばん古い本である。私はこれの入手に努力したが、つひに及ばなかつた。が、岡田氏の蔵本であつた頃、借用することができたので、茲に掲出する。

一、本書に翻刻するに當つては、多く通行の文字に改め、句点を多く入れ、別行を多くつくるやうにして、判読に便したつもりである。

一、本書をなすにあつて、京大図書館、慶大図書館、岡田真氏の御恩恵を受けた。又、大仏関係の資料について、信多純一氏の配慮を受け、筆写については太田武夫氏を煩はしたものがあつた。茲に記して感謝の意を表す。

昭和三十九年一月

横 山 重

目次

みしま (近世初期写本) 五

石山物語 (明暦四年刊本) 四九

大ふつの御えんき (室町中末期写本) 二七

東大寺大仏之縁起（天和元年写本）……………一六七

大フツクヤウ物カタリ（室町中期写本）……………二〇三

解 題……………二四七

附 大仏供養并かまたりの大臣（古浄るり正本）……………二六一

み
し
ま

古
写
本

赤
木
文
庫
蔵

〔みしま〕

そもく、むかし四こくのうち、いよのくに、はんきひのこほり、みしまと申ところに、たちはなのあつそん、きよまさのちやうしやとおはしける、しはうにしまんのくらをたて、こまん人のさふらい、さんせん人の、によはうたちにかしつかれ、めてたく、いみしき、申はかりなし、しかれとも、一人のけふしましまさぬおんことを、あさゆふ、なけきたまふ

あるとき、ちやうしや、みなみおもてのせんさいに、たちおきて、は

なのちるを、なかめおはしける

せうてう、すをくひて、かいこをなし、したひにやうゆくするを、見給ひて、あはれなるかな、てうるいちくるいまでも、ふうふのかたらひあれば、こをそたつるならひあり、そたてをきても、のち、かゝるへきかは、いとをし、かなしと、そたつるに、いはんや、われにんけんにむまれ、ちやうしやとかしつかれけれども、なんしこにても、によしにても、(み魂子)みたまこ一人もたぬこと、かなしけれとて、きたの御かたに、のたまひける

こ一人、まふけてたひたまへ、さらすは、此うちをいてたまへと、おほせければ、きたの御かたきゝたまひて、かなしきかなや、せんせの事はいへとも、一人のこなき事こそかなしけれ

まことやらん、やまとのくに、はせのくわんおんは、こなきものには
こをあたへ、ひんなるもの^(ま)は、ふくをさつけたまふなれば、参りて
申たまへと、のたまへは、ちやうしや、おほきに御よろこひあり

おほくのたからを、たいせんひやくそうにつみて、いよのくにををし
いたし、しゆんふうにほをあげ、つのくに、よとのつへわたりて、く
るまにつみて、はせへ参り、かすのたからをたてまつり、七日さんろ
う申たまへとも、御むさうもなし、二七日にもなし

三七日と申、やはんはかりに、としの御よはひ七十はかりの御そう、
すみそめのころもをめし、かやいろのけさをかけ、すいしやうのしゆ
すをつまくり、御しけんあるやうは

なんち、あまりにこなきことを、かなしむほとに、ふひんにはんへり

て、さんせんたいせんせかひ、のこりなく、かみうちやうてん、しも
こんりんさいまで、たつぬれとも、なんちかこになるへきものなし、
とく／＼けかうし給へと、おほせければ

ちやうしや、ゆめのうちにて、申されけるは、そも／＼きよまさか、
さきのしやうに、いかなるつみの、むくひにて、すゑなき身となりぬ
らんと、申たまへは

御そうのたまはく、なんち二にんは、さきのよに、うしにてあり、こ
のたうをたてしとき、むかしは、きくのはな、なかりしを、てんちく
より、ひともと、わかつてうへわたし、てんにんをも、あまくたらせま
いらせしを、なんちかふさいは、めうしにてありしか、かのはなをく
ひたりし

くきはかりくひたらは、またおへもいつへきに、なんち、こつといにてありしか、たけりをかき、つのにて、ほりうしなひたる、つみにより、えたなき身と、むまれたるなり、あたへへき、こたねなし、はやくかへれと、おほせければ、ちやうしや、なをく申やう

まことに、すゑなき身にはんへらは、ふるさとへかへりても、なにかせん、やまよりもたかく、うみよりもふかき、御ちかひむなく、にくりやうくわんの、せいくわん、ふつせつ、きよこんたらは、われはらかきやふり、ほんそんの御(御頸)くしに、とりつきたてまつり、くるひしに、して、此みたるの、けたうとなり

まいらせんする、きせんしやうけの、人をとりころして、一人もまいらせずして、ち(ま)とかせきの、すみかとなさんとて、一しゆかくなん

なむたいひ、二くのりやうくわん、むなしくは、みよりほとけの、

なこそおしけれ

御そうきこしめして、をとらせんとすれ、こたねなし、とらせすは
わかせいぐわん、むなしかるへし、ほとけになりても、すきんするや
うもなしと、くときたまひけるか、たゝし、おもひいたしたる

こゝやまとのくに、はらのこほりに、によ人あり、ことし三ねん、つ
きまうてして、ふくをいのるなり、かのひんちよに、なんちかたから
をあたへて、かのひんちよかこたねを、なんちにあたへはやと、おほ
せければ

ちやうしや申されけるは、しまんのくら、五まん人のけんそくも、こ
とくく、ほとけにたてまつるなり、たゝみたまこ一人、きつけさせ

たまへと、申給へは、おんそう、さるにても、われうらむへからすとて、おんてなる、すいしやうのしゆすをたまはり、やかてくちにいれけると、ゆめに見るより

やかて、くわいにんのすかた、あらはれ給ひて、ほとなく、あたりもかゝやくはかりなる、なんしをまふけ給へは、ちゆうしや、かすのたからも、けんそくも、なにならす、たまわう殿こそ、うれしけれと、おほしける

さりなから、もしやとおほしめし、くらを見めぐりたまへは、にしきこしやくにすん、みいたしたまひて、くわんをんの御しひに、うふきのためと、おほしめして、のこさせ給ひけると、うれしくて、たまわうとのに、きせたてまつりける

いまは、あさいふの、せいろをも、すきかたくて、ちやうしやは、や
まにいらて、このみをひろい、たきゝをとり、みをたすかり、きたの
御かたは、ならばぬわきに、めかこを、ひちにかけ、(御巫本―いそのわかめを
ひろわせ給ひて、すきさせ給ふほとに、あるあかつき、ちやうしやは、木のみをひろいに、山へいらせ給ふ、女はうは又
めかこを、ひちにかけ)ひろひ、のへのわかかなをつみ、たきゝをとり、によはうは、めかこを
ひちにかけ、いよのくに、すへのゝのへ、いてたまひて、わかめを、
とり給へは

たまわう殿をおひなから、いはのはさまを、のそきありきて、かはと
おとしては、かほといとをしきもの、いかにせんと、あやうしくおほ
しめして、はまのすなを、かきくほめて、にしきのうふきぬにつゝみ
て、をきまいらせ、わかみはおりて、わかめをひろうそのひまに、い
つくよりか、きたりけん、わしといふとり、とひきたり、たまわう殿